

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 3日現在

機関番号：12606

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2013

課題番号：22652010

研究課題名（和文） 日本画の作法―「技法書」と「模本」から探る近代日本画の精神

研究課題名（英文） The form of Japanese Paintings

-The spirit of modern Japanese Paintings traced through “*gihōsho*” and “*mohon*”.

研究代表者

染谷 香理 (SOMEYA KAORI)

東京芸術大学・大学院美術研究科・講師

研究者番号：90572579

研究成果の概要（和文）：江戸時代から昭和初期までの日本画家によって書かれた「技法書」を多量に収集し、統計的に分析することで、現在のように材料という物質によって日本画が定義づけられるようになった過程を明らかにすることができた。また、明治以降の美術学校で使用されていた「模本」の調査により、その変化の過程を裏付けることができた。

研究成果の概要（英文）：

This study shows the process that “Japanese Painting” has come to be defined by distinctive materials the same as today. In this study, we collected “*gihōsho*” (technical books) that Japanese Painters wrote from Edo to early Showa era and analyzed them statistically. Also, we examined “*mohon*” (copies) that used in Tokyo Fine Arts School after the Meiji era. From the above, this study could support the process of changing to define “Japanese Painting”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	510,000	3,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美術・美学史

キーワード：美術史

1. 研究開始当初の背景

現在、日本画は岩絵具や和紙・膠といった画材によって語られることが多くなっている。近年では古典絵画の科学分析や、それらの成果に基づく復元摸写制作、技法書の刊行などによって、日本画が材料によって語られる傾向に拍車がかかっている。しかしながらこれらの傾向は、近世～明治期の技法書には

なく、画材の説明や用法よりも、東洋絵画の伝統に則った画家の心構えや作法が説かれてきた。「六法」の中でもっとも重要視された“気韻生動”や“用筆”の基本である“懸腕直筆”、そして絵画の目的とされた「写意」などの言葉は、今日の日本画家にとって死語となりつつあるが、これらの言葉が忘却されていく過程と背景を明らかにすることは、現代日本画の位置を知るために是非とも必要

な作業である。そして、これら作画過程の作法や画家の精神性は、結果物である絵画作品を科学分析しても見えてくるものではない。画材偏重、科学偏重に流れる今日であるからこそ、逆に、日本画とは何であるかを非物質的な視点から再検証する必要があると考える。

2. 研究の目的

本研究は、日本画家の立場から材料に偏重した現代の日本画観に疑問を提示し、技法書と摸本の分析・調査によって日本画の精神面からの再定義を試みるものである。

従来、東洋絵画の真髄として重んじられてきた絵画の精神性や心構えを表す言葉には、「六法」「用筆」「写意」などがあつた。しかし、古典絵画が科学的調査によって解き明かされ、日本画が画材の物質性によって語られてしまう現在、日本画家にとってこれらの言葉は死語となつてしまつている。本研究は、こうした日本画観の変化と背景を明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

近世～近代の画家が各時代に自らの理念と経験を書き遺した「技法書」を重要な文献資料としてとらえ、収集及び調査分類をすることで日本画観の変遷を辿る。また、かつて日本画の教育上に不可欠であつた模写教育を東京芸術大学大学資料館と京都市立芸術大学芸術資料館所蔵の「摸本」の調査から読み解く。

技法書研究に関しては、まず近代デジタルライブラリーからのダウンロード、古書店からの買入れ、図書館等により文献の収集することから始めた。収集した文献は、江戸時代（元禄以降）の文献をおよそ70篇、明治から昭和戦前期をおよそ80篇、戦後をおよそ40篇である。また文献は必要に応じて翻刻を行った。これらを読み解き、その中から「六法」「用筆」「写意」といった日本画の精神性、または日本画の技法材料をより深く著しているものを30篇ほどを選出し、書誌情報・序文・目次などを整理した。また、著作権の切れた文献を中心に技法書のテキストデータ化も行い、内容ごとに整理してデータベースを作成した。

摸本研究に関しては、東京芸術大学芸術資料館所蔵の5000点あまりの手本及び摸本類が未整理のままの状態であつたため、その整理作業を行うことから始めた。また、京

都市立芸術大学芸術資料館所蔵の摸本の閲覧も行った。これらにより技法書で起つている日本画観の変化と、摸本類で起つている変化の比較をおこなつた。

4. 研究成果

これまでの美術史研究において「技法書」を文献資料とした研究は少なくないが、「技法書」をメイン資料として多量に収集し、統計的に分析する研究手法には前例がなかつた。また、技法と材料は切つても切り離すことができないものであるが、材料に関する研究は進んでいても、技法の研究がおこなわれてこなかつたため、その時代ごとの日本画観やその材料についての扱い方や価値観が検証されることがなかつた。

今回、江戸（元禄）時代から昭和初期までの日本画家によって著された「技法書」を多量に収集することができた。この中には、これまで活字化されることがなかつたために、脚光を浴びることのなかつた技法書も数篇含まれている。本研究では、これらの翻刻を行い、これまで知られることのなかつた技法や材料についても知ることができた。これら进行分析することで、現在のように材料という物質によって日本画が定義づけされるようになった過程を明らかにすることができた。

また、技法書は大きく時代の価値観を反映しつつも、細部においては執筆する画家の主観によって独断される性質がある。これらを客観的に判断する為に、内容の充実した技法書30篇ほどを選出し、書誌情報・序文・目次を整理し、比較検討した。選出した技法書は以下の通り。（※は今回本研究で新たに翻刻を行った文献）

- ① 『本朝画法大伝』（1690年）
土佐光起
- ② 『本朝画史』（1693年）
狩野永納
- ③ 『画筌』（1712年）
林守篤
- ④ 『独寝』（1723年）
柳澤淇園
- ⑤ 『画法彩色法』（1738年）
西川祐信
- ⑥ 『秘文録』（1761年）
円満院門主祐常
- ⑦ 『学翼』（1770年）
久川鞞負
円山応挙 画
- ⑧ 『漢画指南』（1776年）
建部凌岱
- ⑨ 『画鶴』（※）（1783年）
窪俊満

- ⑩ 『漢画独稽古』(1805年)
君山宮瓊
- ⑪ 『嵩鶴画談』(1834年)
桜井嵩鶴
- ⑫ 『画伝幼学絵具彩色独稽古』(※)
(1834年)
鹿田孝清
- ⑬ 『彩色童諭』
鹿田孝清
- ⑭ 『絵本彩色指南』(※)(1840年)
不明
- ⑮ 『椿山書簡』(1846年)
椿椿山
- ⑯ 『画本彩色通』(1848年)
葛飾北斎
- ⑰ 『丹青秘録』(1884年)
加藤竹斎
- ⑱ 『本朝画法』(1884年)
村上奉一
- ⑲ 『晧斎画談』(1887年)
河鍋晧斎
- ⑳ 『絵具使用法』(1890年)
駒井龍仙 草案
幸野楳嶺 訂正
- ㉑ 『雑事抄録』(1899年～)
高屋肖哲
- ㉒ 『絵画之栞』(1902年)
木田寛栗
- ㉓ 『日本画彩色法秘伝』(1902年)
狩野芳崖
- ㉔ 『日本画手引草』(1902年)
木田寛栗
- ㉕ 『日本画指南』(1903年)
奥村石蘭 画
青木恒三郎 編
- ㉖ 『洋画材料品日本画用品明細目録』
(1909年)
大日本絵画講習会
- ㉗ 『画法一斑』(不明)
結城素明
- ㉘ 『丹青指南』(1926年)
市川守静
- ㉙ 『日本画を描く人の為の秘伝集』
(1933年)
本間良助
- ㉚ 『アトリエ美術大講座 日本画科
材料用具解説 2』(1934年)
都筑真琴
- ㉛ 『日本画とその技法』(1936年)
松岡映丘
川合玉堂
結城素明
川崎小虎 他

また、膨大な文献をより効率よく利用する

必要があったため、技法書のデータベース化を進めた。まず、先に挙げた文献の中で主に著作権のきれた文献を中心に、テキストデータ化を行った。そのうち、4篇の文献を収めた技法書データベースをβ版として公益財団法人芳泉文化財団 第一回文化財保存学日本画研究発表展(東京芸術大学大学美術館陳列館一階、正木記念館一階)において発表した。

東京芸術大学大学資料館所蔵の約5000点の摸本類が未整理のまま所蔵されていたため、これらの整理作業を行い、ほぼ完了することができた。これらの整理作業の過程と、京都市立芸術大学芸術資料館所蔵の摸本類の閲覧などにより、明治以降の美術学校で使用されていた「摸本」の主題が、技法書で起こっている画家の価値観の変化と同じような過程を経ていることを裏付けることができた。

5. 主な発表論文

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 荒井経、染谷香理、平論一郎、中村裕美子、杉本史子、国絵図復元一巨大絵図制作の技術一、東京芸術大学美術学部紀要、第50号、2012、pp.5-19、査読有り
- ② 荒井経、染谷香理、杉本史子、「えんぶた」の発見-国絵図復元研究から、画像史料解析センター通信 第50号、2010、pp.8-12、査読有り

[学会発表] (計1件)

- ① 染谷香理、技法書分析のための基礎研究一技法書データベースβ版の作成一、公益財団法人芳泉文化財団 第一回文化財保存学日本画研究発表展、2012年11月1日～11月11日、東京芸術大学大学美術館 陳列館一階、正木記念館一階

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

染谷 香理 (SOMEYA KAORI)
東京芸術大学・大学院美術研究科・講師
研究者番号：90572579

(2) 研究分担者

狩俣 公介 (KARIMATA KOUSUKE)
東京芸術大学・大学院美術研究科・講師
研究者番号：90529950

松村 公太 (MATSUMURA KOUTA)
東京芸術大学・大学院美術研究科・講師
研究者番号：30538765

(3) 連携研究者

宮廻 正明 (MIYASAKO MASAACKI)
東京芸術大学・大学院美術研究科・教授
研究者番号：40272645

荒井 経 (ARAI KEI)
東京芸術大学・大学院美術研究科・准教授
研究者番号：60361739